

るのでしょうか。ここでは、教会と国家との関わりがどうなっているかについても、考察がなされます。

## 1. 神の国の成就

①神は世界史を統治するお方であり、同時に、その究極の意義である救済史を導き、御国を成就されるお方です（エフェ1・4～5）。その際、世界史それ自体には究極の意義はなく、それはカルヴァンがいみじくも述べたように、その上で救済史が演じられ、神の栄光が現れるための「神の栄光の舞台」と呼ばれるべきものにしか過ぎません。舞台には、その時々により、明るい部分もあれば暗い部分もあります。しかし、舞台そのものが栄光に輝くのではなく、その上で演じられる救済史が成就することにおいて、神ご自身が栄光に輝き、また、すべての栄光が神に帰せられるのです。

黙21・1～6

②救いにあずかる者はキリストが再び来られる日、「罪の赦し、身体のみがえり、永遠の生命」を与えられます。そして、完成された聖徒の交わりとして、神が建てられた永遠の都で神を賛美する者となります。

黙5・11～14；同21・22～26；ヘブ11・16；同12・22

③また、そのような大きな歴史的関連においてだけでなく、日常生活を考えても、この時間の中で一人のキリスト者が生まれることを、主は「今日、救いが来た」と言ってお喜びになりました（ルカ19・9；同23・43）。それゆえ、教会は洗礼を受ける者と与えられることにおいて神に栄光を帰し、それを特別な祝福と考えることが許されています。

④神の国はすでにキリストの復活においてこの世に到来し、神の観点から見れば、畑はすでに色づいています。キリストはすでにこの世に勝利されましたので、キリストの再臨は、この世のただ一つの希望となり、光となりました。にもかかわらず、キリスト再臨の日がまだ来ないのは、ひとえに、父なる神が「一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと・・・忍耐して」（2ペト3・9）おられるからです。それだけに、キリストは御国の到来を近い将来のものとし、絶えず目をさまして祈っていなさいとわたしたちに命じられました。それゆえ、キリスト者は終わりの日を待ち望みながら、喜んで宣教に励むことが許されています。

フィリ1・6；ルカ11・20；同12・32；同17・21；2コリ6・2；ヨハ16・33；黙22・20；マタ24・13～14；マコ13・33；ヨハ4・35；マコ4・26～29；マタ9・37～38

## 2. 日本社会および世界が神の国を映し出すこと

①神が世界史を終わりの日まで統治する仕方は、次のとおりです。神は教会に御言葉による統治をゆだね、国家に「剣」による統治をゆだねられました。

ロマ13・1～7

②神はご自身に背くこの世を憐れみ、国家を頂点とするさまざまなこの世の自主・自律的な秩序を立てられました。神は国家においても、ご自身の栄光ある御国とその平和な統治をある程度まで映し出すことをお許しになりました。すなわち、国家は悪の勢力に対抗して相対的な福祉・正義・平和などの実現のために建てられています。また、そのようなものとして、国家は一般に自主・自律的に政治・経済を管理し、法・諸制度、警察組織等々を持ちます。そしてそのようなものとして、国家はどのような政体であれ、原理的には、神の秩序の一部であり、神によって建てられ、また、倒されます。

ダニ2・21；1テモ2・2；ロマ13・1